

秋の断想

秋 の 断 想

筑
摩
書
房

昭和五十二年一月三十日第一刷発行

秋の断想

著者 中村光夫

発行者 井上達三

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(元)七六五一(代表)

振替東京 六一四 一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 矢嶋製本株式会社

© 1977, M. Nakamura

1095-82090-4604

Printed in Japan

目

次

I

金銭と精神

3

「藪の中」から

24

再び「藪の中」をめぐって

39

II

北 欧

65

ハワイの生活

79

ラナイ島行

90

中国の旅

102

III

故人追悼

武者小路実篤	(127)				
志賀直哉	(130)				
正宗白鳥	(134)				
広津和郎	(138)				
*					
川端康成	(140)				
高見順	(150)				
亀井勝一郎	(158)				

伊藤整	(167)				
中山義秀	(186)				
*					
辰野隆	(198)				
鈴木信太郎	(201)				
渡辺一夫	(210)				
佐藤正彰	(214)				
鈴木力衛	(218)				

岩田豊雄	(222)				
*					
神西清	(233)				
原田義人	(238)				
清水崑	(245)				
深田久弥	(251)				
越知保夫	(253)				
古田晁	(256)				

IV

秋の断想 I

老いの可能性を求めて

「若さ」と「老い」

「老」の微笑

自分は大切か

私の健康法

「知人多逝」

秋の断想 II

二つの震災

白鳥と漱石

五十年前の「悪の華」

風変りな秋

旅の仲間

ブラド美術館

雅楽の音

素描

小林秀雄氏

(320)

河上徹太郎氏

(329)

大岡昇平氏

(336)

福田恆存氏

(340)

吉田健一氏

(348)

堀田善衛氏

(351)

あとがき

金銭と精神

今日は日本の近代化のひとつの側面として、お金のことを考えてみたいと思います。

いわゆる近代化とともに金にたいする人々の観念がどう変ったか、それがどうなつて行くだろうかという問題ですが、これはなかなか一筋縄で行きません。すべて金に関することは、複雑にもつれやすいもので、金は魔者などよく云われますが、この金の魔性が、誰はばかるところなく、発揮されたのが近代であるとも考えられます。

さて、金の魔性については、むかしから多くの人々がふれて居ります。金さえあれば老人も青年と同様、女からちやほやされるし、二目と見られない老婆も、絶世の美人の扱いをうけるといふ諺が、たしか西洋の中世にあったように記憶します。

しかし、それでは、このような金の力が、そのまま素直に社会一般からみとめられ、尊敬されていたかというところ、そうは行かなかつたようで、その魔力が強いほど、社会のそれにたいする迫害も強かつたようです。

大体、金銭は平等主義者です。千円の金は誰が持っても千円に通用するのが原則で、これは今では誰でもあたりまえのことと思いますが、むかしで云えば社会の秩序に反する例外でしょう。千円の金を持つということは、乞食にも大名にも同じ力をあたえるので、その金で買える範圍では二人は同等ということになります。

これがけしからぬ例外であることは云うまでもありません。

僕は日本にいますとさほどにも思わないが、外国にいますと、金の有難味が本当にわかる、とよく云います。ことに西洋へ行くと、その大都会の人間は大概あまり親切とは云えません。うっかり店屋などで道をきいたりすると、木で鼻をくくったような挨拶をされたり、ときには出鱈目を教えられたりします。しかし、そこで金を払って何かを買うとか、ホテルならば泊るということになれば、まったく話は別です。彼はたちまち愛想よくなって、その国の人とまったく同じに扱ってくれるでしょう。

むろん、外国人であるからボラれたり、言葉ができないために損をしたりする経験は、誰でも外国旅行をすればするでしょう。しかしそういうことをするのは向うが悪いので、彼も良心にとがめている筈です。

なぜかというと、金は本来人間を平等に扱う性格があり、ものの値段は相手によって変る筈はないからです。王様のものではあろうと奴隷のものであろうと、百円は百円であり、彼がほしいのは、それだけだからです。

たんに平等主義者であるだけでなく、金銭はまた自由主義者でもあります。というのは金がほしいために何かをする者は、自分が他人からの強制でなく、自由意思でしているかと思つてゐるからです。つまり金が要らないと思えば、そんなことをしなくてもいいという意味では、それはいつも自由な行為であるわけです。

古代においても商業のあるところに自由平等の人間関係が生れる、ギリシャがその例だ、とある人が云いましたが、ギリシャが古代世界では例外の国であつたように、ここに生れる人間関係は、古代や封建の社会では例外でした。

社会が細かな上下の身分に分れ、社会の営みの大部分が、命令によって行われる社会で、金銭による人間関係は、その自由と平等という性格で、社会秩序の破壊者でした。

わが国でも、たとえば吉原のようなところで、金だけがものを云う世界をつくりあげたのは、町人たちが、自分だけの平等の天国をつくりあげたいという欲求にもとづくものでしょう。

たとえ武士であっても、お茶屋にあがるときは大小をあずけて登楼する、というのは、ここはすでに武士の権力の及ばない、金だけが支配する、その意味での、自由と平等の世界であることを象徴するものでしょう。

新しい町人階級の文学がここを中心としておこつたのは当然かも知れません。

それはともかくとして、金銭の生みだす、自由で平等な人間関係が、封建社会で例外であつた

のは、さきにふれた通りですが、同時にそれは、相手の親切心とか正義感、あるいは同情などに訴えない点で、一種の非人間的な面を持っていることも注意する必要があります。

僕らがここで人に何をやろうと、また何をサーヴィスしようと、報酬としてお金をうけとれば、それは金が目当であったことになり、金さえもらえば、誰にでも同じことをしたろうと見做されます。

僕らはそこで、相手に好意を持つ必要もないし、相手から感謝を要求する権利も持ちません。すべては「金ずく」で片付いてしまい、誰が誰にしてやってもよい一種の非人間的な抽象性をおびた行為になってきます。

これも、考えてみると自由と平等の一面であり、あるいは博愛にも通じるかも知れませんが、ともかくこうした性格の行為が、権威と身分の秩序で構成された古代社会、あるいは封建社会で、例外的な、秩序をみだすものであることはたしかです。

封建社会において、商行為自体が必要悪として許容され、商業に従事する者が、金貸しや売春婦と同様に、社会の最下層におかれたのは、この理由にもとづくものでしょう。

したがって、封建社会では、金銭は——少なくとも表向きは——卑しむべきものであったので、人前で口にすべきものではないという意味で、阿堵物などと云われてきました。

この点で、金銭は性に似ています。

これは金銭が、人間の欲望のエッセンスである以上当然のことかも知れません。性も金銭も、

人が誰しもほしがるものであり、だからタブーとされたのでしょうか。

欲望を禁圧することが、社会生活の第一歩と考えるのが、封建時代の道徳だからです。

たしか上司小剣だったと思いますが、少年時代の思い出として、母親が金銭を「ババ」(汚物)と呼んだことを書いています。母はいつも彼の所持品を厳重に検査し、「ババ」を見付けると厳重に叱責してとりあげてしまう。ただしそれを自分が貯めてしまうのだそうですが、ともかく「金銭即汚物」という観念を息子に植えつけるのにはきわめて熱心であり、かつ真剣であったようです。

小剣が生れたのは、明治七年ですから、育ったのはもう厳密に云えば、封建時代ではないわけです。しかし、そういう時代になっても、おそらく下級武士の家庭では、このような教育が行われていたのです。

ですから日本の封建制度を破って、社会を近代化しようとする場合に、意識の上の革命として、まずこの金にたいする輕蔑心を打破する必要がありました。そしてこのことを徹底的にやったのが、福沢諭吉でありました。彼は三田の拝金宗と云われたぐらい、金の大切なこと、金銭を卑しむ考えが間違っていることを説きました。

人間に一番大切なのは、一身の独立だ。他からの圧迫にたいしても、自分の信念をまげないで生きて行くことだ。しかしそのような一貫した態度をとるには、他人から借金したりしてはなら

ない。人に世話になれば、どうしてもその人の云うことをきかなければならなくなる。だから一身の独立を保つにも、進んで自分の欲する事業をおこすにも、金は必要だ。請求すべきものは遠慮なく請求し、貯金にも心がけるべきである。金のことだからといって、タブー視するのは間違っている、という考えです。

これは、今日から見れば、いわばあたりまえの常識で、何もとりたてて云うほどのことはないと思われるかも知れませんが、その当時の知識階級には、非常に大きなショックでした。

今日、性のことは大分遠慮なく云うようになりましたが、それでも、そのこと、あるいはそのものを明らかに云うことは、まだ相手に衝撃をあたえることが多いのですが、金は卑しむべきでないという福沢の主張は、性は憚るべきでないという主張が、現代人にあたえると同じ衝撃を同時代人にあたえました。

金銭を重んじるというのは、この場合、経済の問題ではなく、モラルの問題でした。したがって、それは文学の問題でもありました。人間の生き方の問題にからんでくるからです。

たとえば、北村透谷という人がいます。この人は現代の常識から云えば、まったく福沢とは縁のない人です。たんに同時代に生きたというだけで、彼は人間の内面の問題、倫理と宗教に生きたとされています。

ところが透谷の書いたものをよむと、彼は論吉にたいして非常にふかい関心をもっています。

最大級の嫌惡の念と表裏する深い尊敬の念をもっていました。

「明治文学管見」のなかで、彼は次のように云います。

「眼を一方に転ずれば、彼三田翁が着々として思想界に於ける領地を拡張行くを見るなり。文人としての彼は孳々として物質的知識の進達を助けたり、彼は泰西の文物に心酔したるものにはあらずとするも、泰西の外観的文明を確かに伝道すべきものと信じたりしと覺ゆ。教師としての彼は実用経済の道を開きて、人材の泉源を造り、社会各般の機務に応ずべき用意を嚴にせり。故に泰西文明の思想界に於ける密雲は一たび彼の上に簇まりて、而して後八方に散じたり。彼は実に平民に対する預言者の張本人なり。……維新の革命は前古未曾有の革命にして、精神の自由を公共的に振分けんとする革命にてあれば、此際に於て尤も多く時代に需めらるべきは、此目的に適ひたるものなるが故に、其第一着として三田翁は皇天の召に応じたるものなり。」

この引用だけでは、透谷の思想はよくわからないかも知れませんが、彼が諭吉の存在を「皇天の召に応じた……預言者の張本人」として真面目にうけとっていることは、この文章の調子でわかると思います。

むろん彼は諭吉の思想の讃美者ではありません。その人物にいたってはむしろ嫌いだたでしょう。しかし、彼の仕事は、——たとえそれが拝金宗の形をとったにしろ——透谷自身の仕事と深い共通点を持つと信じていたのです。

「明治の革命は既に貴族と平民との堅壁を打破したり、政治上既に斯の如くなれば、国民内部の